

国重要伝統的建造物群保存地区

御手洗は江戸時代の 1666 年に設立された。また、江戸時代には鎖国政策が行われ、外国との接触が厳しく制限されていた。その結果、国内貿易の重要性が高まり、大阪や江戸（現在の東京）と日本を結ぶ航路が整備された。御手洗は主要な海路に位置し、米や酒、塩などの物資を運ぶ貿易船の重要な寄港地となった。船乗りたちは潮の満ち引きや風の変化を待つ間、地元の商人たちが船に食料を補給し、船員たちに宿泊や娯楽などのサービスを提供していた。また、茶屋や銭湯などの商売も行われていた。港町である御手洗の経済は国内経済と密接に結びついており、国内経済の発展とともに御手洗も繁栄した。

商人だけでなく、政界の要人も御手洗を訪れた。地元の大名が都への定期的な出張の際には御手洗に立ち寄り、広島、長州（現山口県）、薩摩（現鹿児島県）に挟まれた港町は、幕末の激動の時代には政治的な陰謀の舞台となった。長州と芸州が幕府と同盟を結ぶために密約した「御手洗条約」もその一つである。この条約は幕府崩壊の重要な一歩であり、何世紀にもわたる鎖国主義の終焉と近代の幕開けをもたらした。

明治時代（1868 年～1912 年）の到来は、鉄道網の開発による国の交通システムの近代化を含む急速な工業化であった。海上輸送から鉄道輸送への移行に伴い、港町としての御手洗の重要性は急激に低下し、経済成長は急停止した。その結果、御手洗の江戸時代の町並みの多くが今日まで残っており、1994 年には国から "重要伝統的建造物群保存地区" に選定された。

歴史ある御手洗は、細長く入り組んだ町並みが多く、江戸時代の典型的な木造格子戸（こうしど）と瓦屋根が特徴的な伝統的な建物が多く見られる。江戸時代後期に建てられた家は、なまこ壁（なまこかべ）が特徴的である。ナマコの色や模様に似ているとされる黒スレートの上に白漆喰で幾何学的な模様を施したもので、ナマコ壁と呼ばれている。漆喰壁は木壁に比べて耐火性が高く、江戸時代には蔵や土蔵の建築によく使われていた。また、御手洗の古い建物の特徴として、高さが低いことが挙げられる。江戸時代には階級がはっきりしていたため、街の上に住んで下の人を見下すのは失礼だとされていた。

今でも御手洗の港には定期的に地元の船が入港しており、歴史ある街並みの中にはかつての栄華が残っている。